

| | | | |
|---|---|---|---|
| 醫 | 師 | 一 | 名 |
| 練 | 習 | 生 | 二 |
| | | 名 | |

以上合計總員四十名

注意 各部學者は、單に學士には限らぬが、學士以上の學力を有するものたるべきを要するのである。

海上部幹部は、凡べて航海學に精通したる、敏腕家を必要とする事。糧食及器具運搬用としては、蒙古產馬匹四十頭、樺太犬三十頭を充用す、この馬匹及犍犬は、各隊員及船員中數名、これが保育の任に當り、部隊行動中は、全員にてよく撫育すること。

從事三行は、年齢滿四十五以下二十歳以上たるべき事、無論身體強壯、壯丁の檢査に於ける、甲と同様の資格あるべき事。(四十五年以下とすれば、明治元年生れ以後

るにな

從事者は後顧の憂なく、現に兵役に關係なく、探檢從事期間は、家族の生計上に配慮を要せざるもの。

從事者は、誠心誠意、死を賭して目的の遂行に力むる事、萬一卑怯未練の心を起したるものは、相當の制裁を加ふる事。

以上の外書けばいろくあるが、マーザットこんなものである。一行は四十である。照山式にいふと、四十のさかしまは十四である。十死を期してこそ萬古に遺す大偉業は出来るものだ。四十の死士が八十の腕力によつて成る、一大事業は、一は以て前辱を雪ぎ、一は以て、國光を發揮するの結果を生まなくてはならぬのである。

二、探檢用船

これはなかく重大な問題である。探檢用船は、バーカントイン型三本橋帆船

速力七浬以上補助機關付きで、總噸數三百五十噸内外のものでなくてはならぬ。

無論、新に設計して、新造しなくては、理想的の用船は得られぬ。

多年造船に従事した経験ある、造船所に注文して、總計經費金拾萬圓を限りとして遠洋航海準備完成する見込みで、製造したなら、目下の經濟問題では、先づ理想的な立派な用船が出来よう。

探檢船に必要な條條は、先づ左記各項である。

A 船體 は頗る堅牢を旨として、氷海の航海に十分堪へ得るよう、構造すべき事。

B 船具 は凡て精選に精選して、探檢終了迄、缺損補充の出来得るよう準備すること。

C 用材 はチーク、或はチークに準する好良なるものを以つて充つること。

D 船室 はこれを別つて、幹部室、學術部室、船員室、海圖室、炊事室、厠、浴

室、治療室、温室、娛樂室、食堂(二個以上三個)等とし、各人毎に臥床及被服雜

具を納るゝ室を区分し、且つ各室共室内電話を設置して、火急の使用に供すること。

而して船室は凡て中甲板にこれを設け、各室の連絡を都合よくする事。

E 船艙 はこれを四個に区分し、一を糧食庫、二を被服庫、三を船具庫、四を雜

品庫とし、雜品庫内には彈藥庫を備へ置く事。

F 石炭及薪類其他燃料は汽罐部の周圍に格納すべく別庫を設置すること。

G 用水船の最底部に設け、傍らバラス代用に充つべく、豫定使用量一倍額以上を

貯藏すること。

H 短艇 は大小四隻とし、其一隻は船底を車仕掛にし、直ちに陸上の運搬にも應

用出来るよう仕組む事。

I 繫留輕氣球 を備付け以て、上陸地選定、島嶼展望等の用に供する事。

J 無線電信設備 を施し遠距離信號の用に供すること、これが信號手は船員中の一人を以て充用すること。

K 獵用火具 の外、一個の太砲を設置し、氷壁破壊、及發砲信號の用に供すること。これは又場合によりては、鯨鯨の射殺を試む用に供するのである。

L 馬匹及輓犬 は中甲板に繫留場を設置し、空氣の流通には各室と共に、最も注意を拂ふこと。

M 装帆、及舵機の操縦等は凡て汽力を用ゆることとし、突差瞬間、船體の動作を機敏ならしむる事。

ホ、糧 食

糧食は事直接の生命問題に關するところ、大に其材料を精選せなくてはならぬ、米、麥、外雜穀類や、其他主用食料となるべきものは従來のものを精選しさへすれ

ばよいが、副食物類及突進用、冬營用の食料は、特に探檢隊用として、精製したものでなくてはならぬ。この事に付ては、予はいろいろ意見を持って居るが、中には專賣特許を受けて、大に世に廣めたいものもあるから、其發表は後日を期することとする。

へ、被 服

熱帯、温帯、寒帯の、三變化を受くる我隊の行路には、夫れ相當の被服の設備が入る、加ふるに洗濯方の困難なる船中では、其着換へも澤山入用だ。特に防寒用被服は従來のものより、價額は高くかゝるとも、輕便にして而も體温を保てるもの注意して撰定しなくてはならぬ。只外見上がよいもの計りでは、今回の白瀬氏考案の防寒服のような、不始末に終るのである、これも予には腹案が充分あるが、尙實行までには大に研究を経るつもりである。

ト、學術器械

學術器械は、今回携行したるものは、多くはありふれたるもののみであつたが、探検用としては、全部これを特製せなくてはならぬ。各種の専門専門に渡りて、本邦で出来るもの外國に注文せなくてはならぬもの、凡て其完全なるものを選び、これに探検用として使ふるように、特別の設置を施さなくてはならぬ、又、凡てが探検期間の使用に差支なき様豊富になくなくてはならぬ。

チ、文房具其他雜具

文房具其他雜具も、船内にて使用するもの、寒地にて使用するもの、各特種に製したものを携行することゝすべきである。これも材料が豊富でなくてはならぬ。

リ、娛樂樂具

娛樂樂具は、ピアノ、バイオリン、の洋樂器も必要だが、日本固有の三味線、鼓、

尺八、横笛等の比較的輕快な樂器を選び、これも數人以上一度に使用し得る丈必要である。又蓄音機も二臺以も有つた方がよい。レコードは和、漢、洋、何れも必要である。

又、結論

以上の設備で、これを實行するには、先づ參拾萬圓以上の經費を掛けなくてはならぬことと思ふ。

赤手參拾萬圓を得るには、前途尙幾多の困難があるだらうが、千辛萬苦は、豫期する處である、陽氣の發する處は金石も亦透る、精神一到、世の事何ぞ成らざるものあらんやである。

況んや探檢の事業は、更に南極の一部にのみは止まらぬ。北極にも尙且つ踏破を要すべき餘地がある。其他遠洋に近海にも尙且つ扨渉すべき問題があるではないか。

我等は、この事業に由て、學術上並に物質上の効果を收め以て、海國男兒の本領を發揮せなくてはならぬ。

請ふ塊より始めよと、予は、提身先づこの事業の犠牲となつたのである。

予と志を同じくする、青年諸子よ、起て奮へ、天は廣く、地は大である。豆

大の一小天地に蝸牛角上の争を事とするのは、今日の問題ではないのである。

南極探檢私録終

出發前の著者と愛犬銀月



南極探檢隊歌

多田春樹作

さして行衛は南の、地軸の果の大氷野、
昔は名に負ふ開南の、重き任務を載せてゆく。
棹す海路千辛の、寄するも何ぞ恐るべき、
迫る山河萬難の、道るも争で厭はむや。
骨を熔かす炎熱の、赤道直下を過ぐる時、
百折不撓の丈夫が、大和心を試さばや。
血汐こぼるす嚴寒の、南極圏に入りたる日、
千挫不屈の我ありと、いみじき意氣を示さん。
あした浪間の糧まくら、襲ふて荒る、海神も、
凝り固まりし我隊の、かたき覺悟を沮むべき。
夕冷たき天幕の、夢なりがかく小夜風、
すさぶもいかで一行が、雄々しき委冒さむや。
有史このかた人類が、足跡印せぬ極南の、
氷野に建てん日章の、國旗はものが生命ぞよ。
三千年の精華に、秀づる國の男の子等が、
等しく唱ふ萬歳の、聲裡に建てん旭の御旗、
七千萬の同胞が、至囑を負ひし我隊ぞ、
幾強邦の視線をば、集めて立ちし我隊ぞ。
いでや行かなん勇ましく、旭の旗風に帆を擧げて、
去らば進まんかへりみず、肥えたる犬を伴侶として。』

附録

極南壯遊詞叢

自序

小田の蛙も深山の鶯も時し來ぬれば歌をしそうたふ。

世にいふ蠻勇とやらに、つゝまれたるわが胸のうちにも、時にまた思ひ出の種となるべき、あやしき想の浮ばざらめやは。

この篇極南壯遊詞叢は、おのが極南の雪山、氷野を跋涉の前後に、禿げたる筆の先きに書き出だせし、雅懐とやらを真似たる、ふしぶしにぞある。

十七文字三十一文字はいはずもがな、あるは漢の人のすなる詩らしきもの、あるは新體歌、あるは唱歌、あるはまた、手弱女のすなる都々逸俗謡の拙き調々など、折

にふれ、興きように接せつして何なにくれと書かき連つらねたる也なり。世よのみん人ひとの譽ほむる毀くわいるはいかで念ねん頭に置おく處ところならやとかくなん。

二次南極探檢よりのかへるさ

春樹記

をりく草紙

南極行

(四十二年八月作)

行ゆけばゆく道みちもあろうぞ雪ゆきのやま

述懐

(五十三年八月作)

みんなみの氷こほりの山やまに日ひの丸まるのみはた建てずばいかでやむべき

述懐

(四十三年九月作)

雪ゆきのみね氷こほりの山やまもなにかせんわが身みにもゆるやまとをどころ

南極探檢途上

(四十三年十月作)

此行欲究天地根 豫期奏功第一番 無父無母無妻子 滿身只有大和魄

赤道夜景 (同三年十二月十日作)
半輪明月一葉船 渺茫棹處赤道邊 帆孕順風乘順潮 丈夫曷想故鄉天

都々逸 (四十三年十二月廿二日作)

吹けよ神風追手の風よ吹いて送れよ南極へ

勅題寒月照梅花 (四十四年元旦作)

大空に氷る月に高どの、まがきのむめは香をはなちつ、

海上迎新年 (同上)

荒波のある、中にも新玉のとしの初旭をむかふけふかな

蓄音機(都々逸)

やつの端唄によう似た聲とくりかへしきく蓄音機

ウエリントン入港の歌 (四十四年一月廿二日作)

綾に畏こき九重の、宮居拜みつ懐かしき、

芝の浦曲を船出しは、去年の霜月末つかた。

日子を閑す七十餘、航程六千幾湮

蹴破る怒濤も面白く、越えし熱帯無風帯。

天の佑を得し船の、船足早く今日此所に、

一行何れも勇ましく、着きけりポトウエリントン。

情けも深きはらからの、至囑を負ひてわけ入らん。

極南の地は今此處を、距ること二千百湮。

恙かなき身は諸共に、天をも衝かん意氣を満つ、

熾熱に堪へし此身もて、いでや進まん寒帯に。

斯くと便りを雁がねに、傳へばやがて邦人の

その喜びや如何ならん、その嬉しさや如何ならん。』

ウエリントンにて (四十四年二月九日作)

ふるさともかくやてるらんうるはしく植林屯の春の夜の月

英艦の喇叭をきいて (同上)

一聲の喇叭の音にいたなき夢ぞ破るる春のあけぼの

日 永 (四十四年一月十六日作)

旅日記清書して居る日永かな

春 風 (四十四年二月廿六日作)

新らし帆を孕ますや春の風

片 吟 鳥 (四十四年二月廿八日)

片吟の叫び身にしむ夜寒哉

南 氷 洋 (四十四年三月一日作)

氷見えて白雪降りてゆく方は寒さの色となりまざりつつ

雪 漫 々 (四十四年三月二日作)

雪漫々静かに更けし海千里

花 が る た (同上)

荒くれた夷男や花がるた

幾 氷 山 (四十三年三月三月作)

夕陽斜映幾氷山、瓊閣瑤臺指呼間、針頭正向南磁極、白帆悠々入仙關。

鯨 (四十四年三月四日作)

氷山の虹はしづきぞ大鯨

望 陸 影 (四十四年三月廿日作)

氷海遙望萬岳連、雲歟非雲白一線、舵樓忽聽歡聲湧、意氣既吞南極天。

折にふれて

(同年四月二日作)

久がたののどけき春をふるさとは花やさくらん鳥やうたわん

同

(四月十五日作)

月清し波路静けし美しきひとあらばやと思ふ夜半哉

同

(四月十七日作)

空や水水や空なるむすばれしころもはるゝ月の海原

千秋遺恨

琵琶歌

(五月十八日作)

去る程に我開南丸は、怒濤狂瀾を事ともせず、酷寒烈風をものとも思はず、勇敢なる乗船員が百練千磨の手腕にて、南氷洋を一直線に、すゝみゆく。三月六日の朝まだき、針頭遙かに一帯の、南極洲の大陸を、發見せしこそ嬉しけれ、「氷海遙望萬岳

連、雲歟非雲白一線、舵樓忽聽歡聲湧、意氣既吞南極天、「只見る白皚々として、千古の英姿神々しき、氷の峯雪の山、白瀬隊長は莞爾として、二十七名一味決死の部下に諸共に、欣舞雀躍遙かに祖國の空を伏し拜み、痛快の感にぞ打たれける。豫定の上陸地点も今數度よと機關の力を増して進みゆく、折しもあれや、飛雪繽紛空暗く鎮す氷盤は前路を遮り、連る氷山は愈多し、三日十日カルマナ島の沖に在り、船は結氷に乗り入れて、進退の自由を失ひぬ、こえて同じく十二日、南緯七十四度迄達せしも、天候險惡になりゆきて、我等の前途は風前の燈火よりも尙もろき運命とこそなりにけれ、流石に猛き野村船長も今は早是迄なりと、白瀬隊長を始めとし武田、多田、三井所などの各隊員と擬議して、遂に背進と決しにける。無念なる哉、凜然たる一行の士氣は益振えども、天の時に利あらずして、待ちに待ちたる千載の好機をば爰に一度空しくも我等の掌中を逸し去りしぞ遺憾なる。」

岡山の歓迎會にて (八月二日作)
旭川あさひがはさしのゆふかせそよくとふかき情なさけをたぐふけふかな

豊岡の歓迎會にて (九月十一日作)

たで川たけがわの鮎あひかみしめて語りけり

思おもふどちへだてもあらずまとゐして語りふかせし但馬路たじまぢのやど。

豊岡秋長風月清、今宵并得情又景、極南天地寂寞夕、想起當年諸卿影。」

京都舊師の宅にて (九月廿二日作)

かも川かまがわの清きよき瀬せの音ねにたぐえつゝむかしがたりをさくぞうれしき

辭 皇 天 (十月十四日作)

二重橋畔朝色鮮、恭拜皇居辭皇天、艸葦置多田惠一、此行欲究天地根。」

三井所君馬鹿を釣る (十二月四日作)

どれ味あじをためし三井所さんせいじよとかゝらずはばかしくもつられざらまじ

想 郷 (十二月七日作)

あらかなみの夕ゆづかちとる束つかの間まもおもひやらるゝふるさとのそら

氷 盤 來 (十二月十一日作)

氷盤ひょうばんに小便せうべんして寒さむさかな

花守先生海豹を逃す (十二月十六日作)

海豹かいへうをあたらにがして花守はなもりがアイノいのとかこつけふかな。

氷 海 の 歌 (十二月十八日作)

空そらはいつしかするすみの 雲くもに蓋おほひてものすごく

吹かきしく風かぜは帆ほに充みちて 檣マストも折なるゝ計はかりなり。

逆さかまく浪なみは九天てんの 上うへよりやがて千仞せんぜんの

谷と落ちゆき甲板は 浪にしばく浸すなり。

風にたぐえて白雪は 小やみもあらで積りゆき

絶えては断く氷山の 数いやましに流れ来る。

見張樓の窓寒く 甲板は白く白がねか

瑠璃かともがう許りにぞ 氷結すなり帆繩迄。

霏々と降り来る白雪は 衣手重く積れども

君の御爲めにいで立ちし 任務は更に重きなり。

寄せては返す荒浪に 梶とる小手は重けれど

國の御爲とすゝみゆく われらの任務は尙重き。

四方海なす日の本の 國に生れし丈夫が

百練千磨の腕前を 試すはこゝぞ南氷洋。

氷盤連る海原を ゆくわが船のをしよよ

エンヤの聲も勇ましく 怒濤の叫びと和する也』

氷海の船員 (同上)

風さわぎをなみさかまく荒らみに日本男子のをさげびのこゑ

夢を見て (十二月廿日作)

夢路こそあやしくかつはうれしけれなきたらちねとあひつ話しつ

雪鳥を見て (十二月二十五日作)

けがれたる思ひをすて、ゆき鳥の白さをひとのこゝろともがな

白雪をわくる白帆をなづかしみけふも来て飛ぶ雪鳥のむれ

勅題松上鶴 (四十五年元旦作)

ふるさとの老その杜のわかまつに今年も鶴の千代よばふらん

初日かげさすや宮居の松が枝に千代よびがわす鶴の二むれ

氷山を白帆と間違へた時 (二月十日作)

もうこぼりくしたとは氷山を帆と間違へた時のたわごと

亞歷山にて (一月廿四日作)

まとひせる片吟鳥をうつ身にもなどふるさとを忘るべしやは

片吟のあたゝかきゆめ破りつゝゆきの山こえ河こえてゆく

いざさらばはげめとすゝむわがおもをかたみになづる吹雪寒風

靴の音と杖の音との外はまたひいきもたゝす雪道千里

あざらしや一百年を雪の夢

氷原雪野

從是直南二千里、氷原雪野垣如砥、習々極風高嘯誰、曰我日東快男子。

片吟のゆめ破りつゝかへりみすすゝむ男の子のいさましきかな

海豹 (二月七日作)

雪の日やとい(海豹)に喰ひあくひとりもの

海豹の銅酬也そ雪の庵

紀元節に

五千里の波路の外に君が代の千代を壽く荒丈夫のむれ

追分節 (二月廿六日作)

なみはさかまくさかまく波にぬしの白帆はゆれてゆく

星を見て (三月八日作)

春ながら花の香もなき海原はほしの光をいろとしも見む

亡愛猫玉を想ふ (四月十三日作)

荒なみのもくすとさえしなきたまのたまやらづくの汐に浮べる

スコール (四月廿五日作)

スコールの涼味のこして通りけり

帆影讀書 (四月廿七日作)

帆のかけや苦熱を忘る水滸傳

赤道通過 (五月八日作)

赤道の熾熱にやけし男の子かな

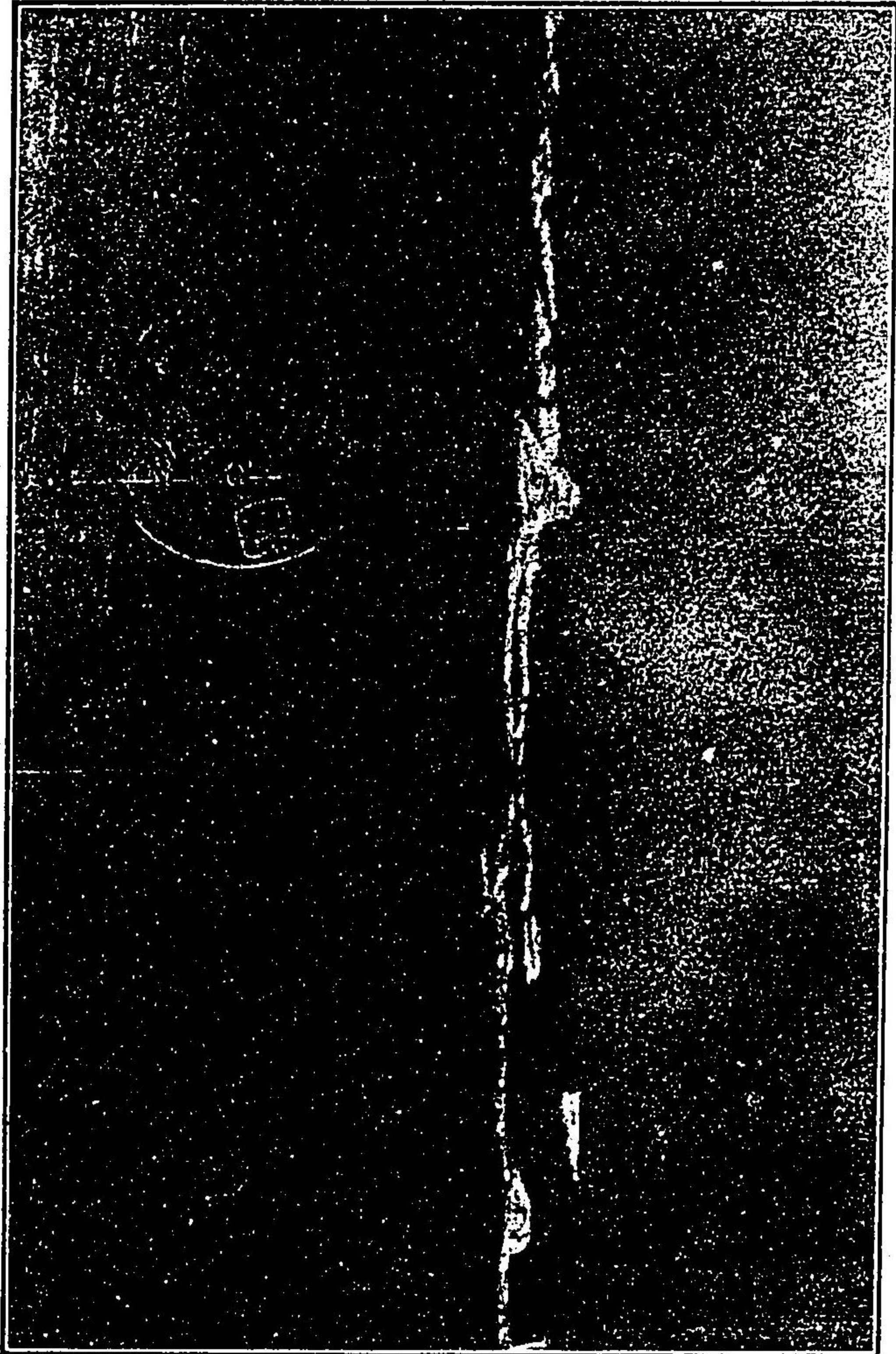
帆のかけに寝て赤道を通りけり

月の夜 (五月十四日作)

五月廿五日作

海月明月 (五月廿五日作)

部一の堤氷の頭灣ユスビ



海原にやどれる月も大空の月もさやけくすめる夜半かな
波もなき青海原の水かきみ月も姿をさもはづるらん

同

(五月廿二日作)

夜もすがらさやけき月に添臥のまくら別たんよき人もがな

小笠原島を望む

(六月一日作)

ふるさとの島と見るだにうれしきを父よ母よとたがなづけしむ

母島を見て

(六月五日作)

今朝見れば早目の前に来りけり呼べばこたへん母島のかげ

小笠原父島偶成

(六月七日作)

正是我行喜望峰、悠然投锚意氣揚、巖父濱頭慈母愛、遊子何堪今夜情。

歡迎會にて

一兩に芭蕉のみどりふかみけり

都々逸

(一より五まで讀込む)

一。めみてさえうれしや二見三んな四ろこび五さみたつ

扇が浦にて

(六月八日作)

朝な夕なすいしき風にそよぐらんあふぎが浦の木々のみどり葉

鳥島を見て

(六月十二日作)

風あらばなんの苦もなくするくとんとんで越すのに鳥島の沖

歸航の歌

(六月十二日作)

第一 齣

やまと男の子はかくこそと

心の駒にむちうちて

サラバの聲も勇ましく

をしくたちしふるさどよ

あしたあらしすさぶ日も

忘れかねたるふるさどよ

ゆふべゆかしき月かげに

思ひ出多きふるさどよ

第二 齣

こゝに三とせをこつくにの

潮路の果におきふして

衣のたてはいつしかも

ほころびそめてふりけりな

今日たちかへるたびころも

戀しき山河をながめては

鬼にもおぢぬ荒良夫も

そいろ思ひに沈むなり

第三 齣

南のを極めむと

かどびのあした誓ひしを

人に後れはとるまじと

わかれの夕語りしを

わが業成らず功成さず

今日ふるさとに歸るとき

われらの袖はしめやかに

慚愧の涙にぬるゝ也

第四節

四萬哩の荒なみの 長き航路を辿りてし

千辛萬苦の甲斐もなき 今日こそいとはづかしや

さはれ一度誓ひてし こゝろは堅し七八たび

ほたれてややまぬ覺悟もて 男の子のみちをすゝまなん

青が島を見て (同上)

あほが島まといふ千草のふかみどりわが船むかふよそひとや見む

横濱埠頭作 (六月十九日作)

同情喚呼起兩舷、遠征壯士萬感牽、横濱埠頭袂別夕、豈期今日再會緣。

戯作

開南九百人一首の内

あきれたよロースの海の波をあらみわか衣手にしほかぶりつゝ

寒帯過ぎ温帯らしも白くろのすがたかわりて飛ぶ信夫翁

久方のみそらも晴れし海原にこゝろ静けく糞やたるらん

南溟に島だも見えず舵取るとつげてくれぬか空と女鳥よ

この度は上陸出来ず南極を尻に帆かけて風のまに〜

千早ふる神代もさかす南の極のはてにはたれもゆきしと

あし引の山もながめずつれ〜のながき船路をひとりかもねん

片吟のなきつる方をながむればたい氷山の群ぞながるゝ

風も變し氷もうらめし此春に上陸出来ぬことをおもへるば

南氷洋片吟鳥のこえくはふるまどしのぶわかき船取
 國の爲め氷の海にのりいでし船をつゝみて雪は降りつゝ
 ゆられつゝあら波さわぐ朝夕はいかに苦しきものとかは知る
 氷盤のならべる海に片吟のむれ遊び居る影ぞ戀しき
 はりつめし氷計りのさまたげにわが船ゆかぬことぞくやしき
 見せばやな膽の小さき人々に荒波くゝる船のすこさを
 信夫翁うてばながるゝ海の中いつ落つとても口惜しかるらん
 さしてゆく南の果の遠ければたほれてやまぬこゝろともがな
 夜もすがらひるはひねもす荒波にゆらるゝ頃はよからざりけり
 わがひげののびにもけりないたづらに半年計りうちやりし間に
 今はい南の果のはつゆきに人あとならであふよしもかな

はるからに船もおもひにまかせねばこほりくゝと人のいふらん
 エレバスの裾の片吟心あらば今一度の逢瀬またなん
 あさぼらけ氷もちかと思見るまでにロースの海にならぶ氷餅

附 録 終

折にふれて

春樹

大きみのみくくの

ためにたゆみなく

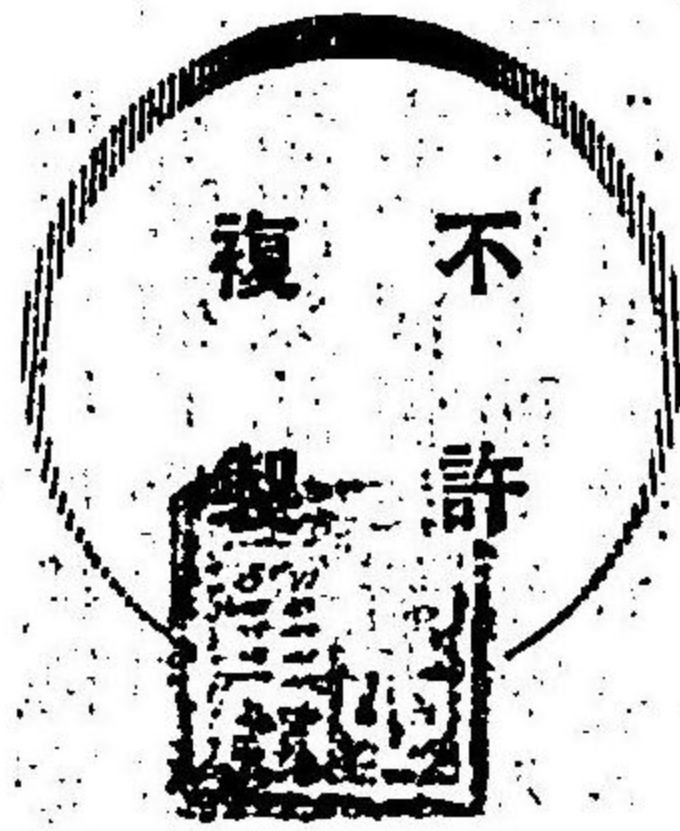
やまとおの子の

みちにすゝまむ

明治四十五年七月廿七月初版印刷
明治四十五年七月三十日初版發行

南極探檢私錄奥付

定價金八拾五錢



著作者

多田惠一

發行兼印刷者

株式會社 成社

代表者 遠藤國次郎

東京市日本橋區本銀町三丁目二番地

發兌元

東京市日本橋區本銀町三丁目二番地

株式會社 啓

成

社

電話本局三、一〇〇番
振替東京二、〇五五番

東京市小石川區新町二番地

明治製版印刷會社印刷

春樹多田惠一君著

箱入洋裝頗美本全一冊地圖貳葉コロタイプ一葉
三色版三葉寫真網版數十葉挿入

南極探檢日記

定價金壹圓拾錢
郵税金拾貳錢

探檢隊の完全なる日記

前に南極探檢隊書記長として開南丸に搭乗し極風沐雨二十有餘月鵬程四萬餘哩を蹴破し極南の氷山雪野を跋渉したる著者が其折々の日記の抄録は全國幾百の新聞雜誌に掲げられて讀むものをして血湧き肉躍るの感あらしめたるは今尙讀者の記憶に新たなる所ならん本書は即ち著者が此行の詳細なる日記にして艶麗にして而も流暢なる筆を以て品川灣頭出帆以來熱潮を越え氷海を渡り氷野を踏み雪山を攀ち幾多の困苦と闘て遂に極南の地に日章旗を樹立するに至る迄の勇壯無比なる記事は讀む者をして自ら奮起せしむるものあり正に是れ浮華輕佻に流れんとする現代思潮に對する一服の清涼劑たるべきの書就中巻頭巻中に挿入せる繪畫數十葉は又稀世の珍品にして錦上更に花を添ふるものなり極東大帝國の快男兒須らく一本を供へて樹下水濱の伴侶とすべきなり

發兌

東京市京橋區中橋廣小路六
振替東京四一〇九電京三七七

前川文榮閣

福本日南先生著

菊版上製頗美本函入 定價二圓廿錢 郵稅十二錢
袖珍上製頗美本函入 定價一圓廿錢 郵稅八錢

天覽元祿快舉錄

題して元祿快舉錄と云ふ事は赤穂四十七士が千古の快舉筆は一代の巨匠日南先生が獨特の文此二點先づ人をして神躍り魂飛ばしむ竹田出雲が忠臣蔵より雲右衛門が浪花節に至る迄通俗的傳説何ぞ多き然も其眞を得るもの幾許かある室鳩巢の義人録より信夫恕軒の講話に至るまで學者の指を染めしもの亦幾回然も語つて精しきもの幾何かある其精しと云ふものは市井の好奇心に投ぜんが爲めに粉飾せられたる架空の談話に非ざれば其確實に近きものは周圍の事情と時代の精神とを顧みせられたる漢學者が強ひて自家の極枯に倣入したるものも多年日本武士道の精華として推稱せられたる義人の傳記が何時迄斯くて止むべき也
日南先生茲に慨し今や椽大の史筆を呵して之が正傳を立つ本書三篇三百十章上篇は凶變の發生より義士の東下に至り中篇は忠姦個々の列傳下篇は討入より蓋棺事定に終る考證精確幽を闡き微を穿ち詳密を極めざるはなし加ふるに先生一流の言文一致紆折の筆を以て之を注ぐ處に及べば二百年の後四十七士の眞面目眞骨頭躍々として紙上に現はれて其風神の近代絶調の文字にして又古今第一の義士傳

農學士 南鷹次郎先生校
農學博士 大島金太郎先生校
農學士 星野勇三先生校

農學士 莊司力松先生共
農學士 鈴木敬策先生共
農學士 戸澤力藏先生著

全四冊洋裝美本
各冊約三百頁
定價各五十錢
郵稅十六錢

通俗農家副業全書

本書は莊司・鈴木・戸澤の農學士が多年の研究に基き、之に實地の經驗を加へて著述せられたるものにして、文體を平易にして總ふりがな附言文一致となし、何人と雖も一讀して其方法を解し易からしむ。

試みに本書の一斑を云はんか。養鶏、養豚、養畜等に關しては、深遠斬新なる諸大家の學說を極めて平易に説明し、農産製造に就いては、懇切にその方法を解説し、如何なる小規模にも應用することを得しめ、花卉、盆栽、園藝等に就ては殊に詳密に説述し、讀者の趣味を増進せしめ、傍ら清新なる生園の娯樂的副業を提供せんことを努めたり。

以上説くところの如く、本書はあらゆる農家の副業に就て説き、全部の紙數一千二百頁以上の大冊となれり、これを家庭に備へ實地に應用せば如何なる凶年も憂ふるに足らず、倉庫自ら綽々として餘裕あるに至らむ。

露國海軍武官

レンガード君原著

菊判上製頗美本函入

高須梅溪君

加島汀月著譯

定價一圓卅錢 郵稅八錢

旅順籠城劍

(一)

戀

日露戰爭は近世史上の一大事件にして之が記述は所在に出版せられたりしと雖も露國海軍に屬する若き武官の告白は未だ公にせられず本書上編「戰塵」は武人として珍らしき詞藻を有する著者が旅順籠城中の日記に基き二百八十餘日に亘る屈せざる抵抗中の悲壯事を細大洩さず收む多大の犠牲を拂ひたる我攻圍軍の威力如何に猛烈を極め又千古の快事として嘆稱せられたる閉塞隊の行動が如何に敵の心膽を寒からしめたるかを知るには屈竟の資料たり下篇の「お花さん」は旅順開城後俘虜として我が國に滯在中端なくも日本の一少女を戀ふるに至りし艶物語にして青春燃ゆるが如き情緒を寫するに絢麗措くなきの筆致を以てす正に是れ活きたる小説にして日本の全勝を趣味ある方法に傳ふべき不朽の戰史也

海軍機關中佐 栗田富太郎君著 菊版上製頗美本函入 定價一圓郵稅八錢

旅順閉塞回想談

日露戰役に於ける我が旅順閉塞の擧たる夫のサンチアゴ港口封鎖とも東西同一轍の壯快事と稱せらる本書は軍神廣瀬中佐と前後二回機關長として閉塞の事に従ひ軍神斃れ身亦重傷を被りたる栗田機關中佐の實歴を直寫せるものにして筆路暢達骨裂け肉飛ぶの慘狀を叙述すること頗る詳明を極む加ふるに卷中挿むところの寫真版悉く當時苦戰の狀を寫して餘蘊なく日東海國男子が身を挺して國難に越くの光景昨猶今の如く一讀爲めに肌粟を生ぜしむ

海軍少佐 石原忠俊君 共著
陸軍大尉 本間徳次郎君

菊版上製頗美本函入

定價一圓廿錢郵稅十二錢

ネルソンとナポレオン

不世出の大英雄ナポレオンは實に空前絶後の戰略家にしてネルソン亦古今無雙の水師提督たり此兩者の出づるや殆んど時を同じうし英佛を中心として全歐洲に萬丈の波瀾を捲き來るところ眞に駭心驚魄に耐へざらしむるものあり本書の著者石原、本間の兩氏は歴史の造詣深く我邦武人中稀に見るの詞藻を有すと稱せらる而して今や共に筆を揮つて彼の兩雄を描く著者と題材と相俟つて更に一毫の贅を加ふ可らず筆を先づ佛國革命以前に於ける兩雄の生ひ立より起し來りネルソン歿後のナポレオンに終るまで滔々二十六萬言或は戰略を評し政治を論じ其間また巧みに兩雄の人物性行を捉へて赤裸々に剖折し之に配するに窈窕たる美人を以てし情緒纏綿の狀興會轉々限りなきを覺えしむ軍人といはず志士といはず我帝國の價值と任務とを知察せんとする者必ず本書を讀まざるべからず

元軍艦初瀬乗員
海軍少尉

市川禪海師著

菊版上製頗美本

定價一圓二十錢郵稅八錢

殘

花

一

輪

是れ曾て狂憤七たび死を決して遂げ得ず大悟一番佛門に入りし隻脚少尉の發心録也師や日露の役に軍艦初瀬に乗じて風黒き旅順の沖に梶村、鈴木の兩盟と死誓を約し忽にして梶村斃れ鈴木亦初瀬と共に沈む而して身は傷病頻に發して意の如くならず此間悶々或は死を企て或は自ら勵まし一度浦鹽攻撃に參列し又日進に搭じて日本海大海戦に従ひ更に樺太を略するに至るまで終始病を襲みて軍務に當りしかば戦局終りを告ぐるに及びて仰臥の儘三年を過し大手術後隻脚するに及びてや鬢然髪を削りて一箇の今道心とはなりぬ本書は如上の經歷を著者の偽らざる筆もて中宵佛前に於て草したるものにして波瀾重疊一面日露海戦の秘録たると共に一面著者半生の哀史也而して此間溫雅玉の如き慈姉あり秀麗花の如き處女あり其上將部下父母昆弟師を繞りて點綴の妙を極むること一篇小説より奇也何人も一讀を要す

文學博士 遠藤隆吉先生著

上下全二冊和製

定價各廿五錢郵稅各六錢

青年

常

識

讀

本

遠藤先生は本邦社會學の泰斗にして現に帝國大學高等師範早稻田大學及東洋大學等に其得意とせらるゝところを講述せらるる本書は先生多年の研究に成り自治國民として青年の必ず先づ心得置かざる可らざる事項を最も組織的に説述し綱を張り目を舉げて極めて平易簡明に執筆さられたるものなり左れば從來市上に流布する讀本の如く單に他人の文章を補綴按排したるものと異なり首尾一貫して常識の養成に資すべきもの多かるべし世風蕩々動もすれば空疎の談義に趨り實際的知識に乏しき今日全國青年團夜學會補習學校等の教科書として此上もなき好著也

首相侯爵 西園寺公望閣下 題字
文部大臣 長谷場純孝閣下
伯爵 土方久元閣下
故伯爵 東久世通禧閣下 共著

乾坤全二冊和裝高雅

定價各三十五錢郵稅各六錢

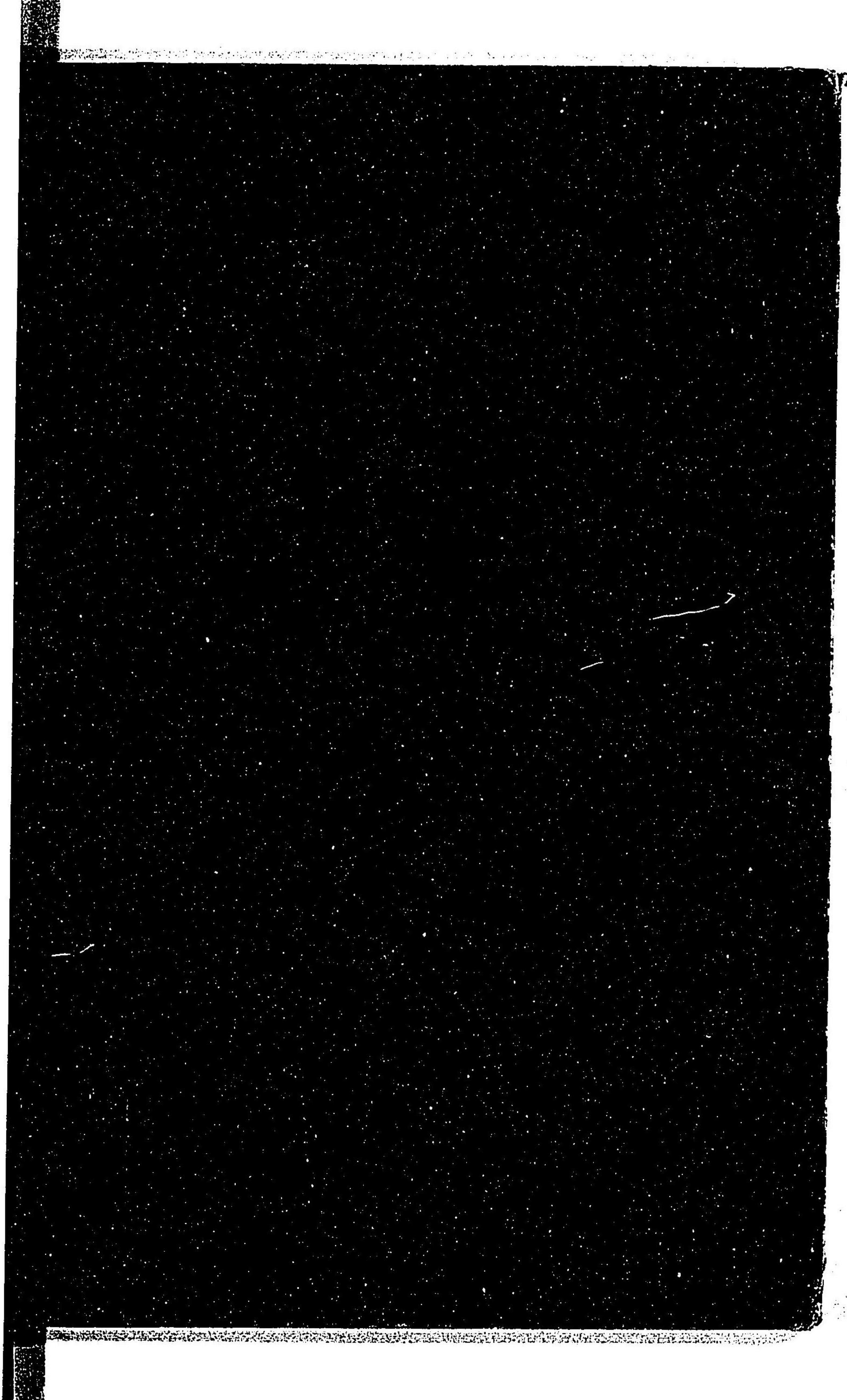
天覽 國民修身訓
台覽

前宮内大臣土方伯及び故樞密院副議長東久世伯の兩公は夙に維新の大業を翼成し奉り爾來數十年始終一日の如く御大身側に近侍せらるゝの忠臣なり而して今や人心の日に非なるを慨し俱に與に多年蒐集せられたる古今節義の傳記を編纂して此一書を著はざる正に國民道德の依つて歸向する一大典據にして人々必ずや先づ誦せざる可らざる不朽の經籍なり

乾の卷 勤學行 立忠節 和順 友愛 信義
坤の卷 剛毅素 公忍耐 度師量 廉潔 敏智

332

322



332

322

Ⓜ

026988-000-1

332-322

南極探検私録

多田 恵一/著

M45

ADH-0008

